

じ、甚だ尊敬する餘り、清正の肖像を造立して、淨池院清正大神儀と諡號を稱し、右肖像をば全性寺の境内に安置せんと、祠堂を造立せり。はその濫觴にて、それより信仰の徒追々盛大に成り、今日の休裁に至れりといへり。按ずるに、清正の祠は加藤家の舊領肥後國熊本に錦山神社と稱し、明治四年に縣社に列せられたりとぞ。是則ち本社なり。

〇二王尊

全性寺の二王門の二王なり。此の二王は、脚氣其の外脚部の病氣を祈念するに、甚だ靈驗奇瑞有りとして世人信仰しけり。如何なる由縁にていひ出でけん。其來歴は詳かならず。

〇本覺山蓮覺寺

法華宗也。貞享二年の由來書に云ふ。當寺開基勸持院日長、元和二年卯辰山に小庵を結び罷在、弟子善行院日安に讓之。寛永九年京都本寺妙顯寺より寺號之曼荼羅を請來。爲什寶子安之觀音并七面大明神之繪像二幅、筆者不知候へ共古筆、殊に七面は靈驗新也。當地清水谷屋清右衛門常々信仰致し、不思議之蒙靈夢。依之庵主日安与心を合はせ、本寺に訴へ寺號を請く。施主之法名蓮覺日就と云ふ。其の

戒名を以て蓮覺寺と號す。とあり。

〇開山日安傳

延享四年の過去帳に記載せる開山傳に云ふ。善行院日安和尚。肇而開茲。斯僧往昔於能州石動山驗者。南之紀州役行者提婆品之嚴窟。整其別當。則任萬福寺貫主。時哉内發昔日之冀。外感像師之德。忽改邪宗。幸持正法。策勵不斜。功成德至。于終職加州法蓮精舍焉。近隣縉素學而尊崇。故欲更造一字以備報恩而宛夫望。今蓮覺寺是也。則安公奉持靈驗七面安置此寺。奇瑞日夜新。威光月々増益。園國歲々蒙澤。寺塔漸盛矣。とありて、元は能登國石動山の衆徒の一人にて、眞言の驗者なりしかと、眞言の密教を捨て、法華の權者と成りたりといへり。

〇七面堂

蓮覺寺の堂内にあり。此の七面は繪像にて、寺の傳説には土佐信之の筆なりといへり。宗祖日蓮聖人の時、信之調筆して蓮師へ捧げたるを、蓮師より日像上人へ讓與あり。蓮覺寺開祖日安亦之を持傳へて當寺に安置せし靈像にて、靈驗殊にいちじるし。故にむかしは甚だ名高く、參詣人常に

群參せしかど、中古より衰微せり。正徳五年に上梓せし三箇屋版の六用集に、九月十九日卯辰蓮覺寺七面祭。とて、金澤市中高名なる祭禮中に此の七面祭を載せたり。是等にてこそのかみ流行せし事知られけり。但し今按ずるに、此の蓮覺寺なる七面は、貞享二年の由來書に、日安代寛永九年本寺京都妙顯寺より寺號を請、爲什寶子安之觀音并七面大明神之繪像二幅、筆者は不知と雖古筆、殊に七面は靈驗新也。と載せられたば、土佐信之の筆也といふはいか。恐らくは後人の云ひ出せる事ならんか。元祿三年に撰述せし七面大明神の縁起一卷傳來せり。其の寫如左。

七面大明神之縁起

趣物懷慈興悲、同塵結緣期終覺始。天心不測

宗而尙崇焉。原夫七面大明神者、元祠于甲州七

面山。因以名神也。此山峻險而且可畏。未曾有登陟者。無知山上如何。唯自往古以山屬神。爾稱而已。或龍神七頭説不審有何據乎。日蓮上人在身延山。演説法華。一日來詣衆中。有一婦人。法坐近居焉。不知其來所。非交山人農夫之間。儀容最美。波木并實長及會中男女悉恠疑。時祖知之。

告會中曰。今當此會有懼怖事。敢毋驚動。而又告前婦人

曰。汝露本身。婦人答曰。於少授水。祖命侍者令寄花瓶。

瓶水一滴灌婦人頂。婦人得之。忽變作蛇。長一丈餘。纏繞

花瓶。矯首齒。舌紅吐火。甚可怖畏。更還復女身。渴仰

聽法。隨喜發誓。誓曰。妾爲護法神。常令此山無水火兵革

之災禍。令寺院久遠。深信一乘。回向無上菩提。令其所

欲願皆如意吉祥。白已而去。會中欽然。而自慙狐疑矣。釋

尊空會雲上。龍女來浴法水。佛祖之道正雅合焉。奇哉也妙哉

也。其事六老僧記祖師口傳之中。所謂及講提婆品。蛇來聽

聞矣。是此明神耳。從之已來。爲圓宗擁護之神。身延山之鎮

守。一時有火起將燒失。貫首日道上人無驚。謂曰。神捨

我山不。捨不護者知滅亡時。防之何爲。所言未竟。降雨如

浮。焚火速消。又或時強賊狼藉。衆兵倏現。攘其惡黨。至若東

照宮重加護。萬代不易。不可以俗家權威而侵。山三條賜朱

印而堅定行焉。内護外助已無變災。神女願誓信不虛也。又

中古雨畑土人。到七面山之隣峰獵焉。偶憩一處。見前有物。

似佛像甚古。長二寸餘。持還舍。至晚一家皆受疫疾。其村

有一信士。舉像安置吾家。家又受疫疾。唯家主無故白像